

濃飛抄

地域の視点から

*「かわいい」福島の子ども

ひた高山総局長 浦田直人

葉は、普通にかわいいという時にも使うが、かわいそうに感じられた時にも使う。悲しげにほほ笑んだ。三宅さんの表情は、そ

かのように、雨間を縫い、外に飛び出した。同市久々野町の果樹園では、まだ冬枯れの園内で元氣よく活

とても楽しい」。女の子はそう話した。三宅さんのところでは「源流に行ってきたよ」と、泥だらけ

背負った苦勞を氣遣う

「かわいいなあ。福島に帰ったら、また窮屈な暮らしをしなければならん」。原発事故被災地の子どもたちを一週間近く預かった高山市一之宮町の民宿「みやけ荘」の三宅幸恵さんは、すっかりなつてくれた子どもたちを思い出し、そう話した。

「かわいい」という飛騨の言葉そのものだった。子どもたちが高山入りしたのは先月末。寒くて荒れた天気が続いた。でも子どもたちは、福島での生活の埋め合わせをする

動した。伐採された木の枝をみながら拾い集め、表皮を削った。かすかなリンゴの香りに大喜びした。「外のものにはさわっちゃいけない」と言われてるから。

で帰ってきた。それはすぐ裏手の山の水路だった。小さな手のひらにフキノトウをいっぱい乗せ、「これ夕飯のおかずにして」と幸恵さんに差し出した。

台所でつまみ食いをしたり、男の子たちは枕投げで大暴れしたり、最後の晩は、居間に遊びに来た子もいた。三宅さん夫婦に「お父さん、お母さんへ、毎日おいしいごはんありがとう」と、みんなで書いた手紙を渡してくれた。幸恵さんは、こみあげるものを抑えきれず、小さな子をぎゅっと抱いた。

「あんな子どもたちから、苦勞を背負ってかなならん」。幸恵さんは何度も「かわいいなあ」を口にした。